

「論語と算盤」著者：渋沢栄一（しぶさわ えいち）（現代語訳：守屋淳）

今回の読書案内は、4月NHKの「100分de名著」を見たのがきっかけである。講師は守屋淳、25分の4回にわたる番組。今年の大河ドラマの主人公であり、新一万円札の顔にもなる渋沢栄一（1840～1931）。

約500社もの企業を設立し、500以上の社会事業にも携わり、「日本資本主義の父」「実業界の父」と称される人物である。

彼の一生は大きく5つの時代に分けて捉えられる。

- ① 郷里の村落で過ごした江戸後期の幼少時代
- ② 尊王攘夷運動に加わっていた幕末の青年時代
- ③ 徳川家に随行し、渡仏して大政奉還に直面した時代
- ④ 大蔵官僚時代
- ⑤ 実業家時代

このような人生を通して、彼は豊かな国を作るため自ら率先して起業し、産業を興そうと決心したのである。

本書は渋沢栄一が直接書いたわけではなく、その講演の口述をまとめたもの。編集者であり実用書の著者であった梶山彬が90項目を選んでテーマ別に編集したのが本書になる。

明治維新後、彼は政治ではなく日本の実業界、ひいては資本主義の制度を設計した人物である。そして注目すべきは、今から100年以上前に、「資本主義」や「実業」が内包した問題点を見抜き、その中和剤をシステムの中に織り込もうとしたのだ。

もともと「資本主義」や「実業」とは、自分が金持ちになりたいとか、利益を増やしたいという欲望をエンジンとして前に進んでいく面がある。しかし、そのエンジンはしばしば暴走し、大きな惨事を引き起こしていく。

だからこそ、栄一は「実業」や「資本主義」には、暴走に歯止めをかける枠組みが必要だ、と考えていた。

その手段が、本書のタイトルにもある「論語」だった。

栄一は、この「論語」の教えを、実業の世界に植え込むことによって、エンジンである欲望の暴走を事前に防ごうと試みたのだ。本書のちょっと奇妙なタイトル「論語と算盤」とはまさしくこの思想を体現している。

以下本書から、「経済活動」及び「人の生き方」に関する抜粋

【経済活動について】

◆ 本心に正しく経済活動を行う方法

本当の経済活動は、社会のためになる道徳に基づかないと決して長く続くものではないと考える。

しかし、現実に立脚しない道徳（利益を生まない道徳）は、国の元気を失わせ、モノの生産力を低くし、最後には国を滅亡させてしまう。

「利益を得たい」などの欲望を実践に移していくためには道理をもって行うこと。

◆ 商業道（武士道に対する）

商工業者が経済力や地位の方を根本において、人としての道や社会道徳を枝葉末節においてはならない。

◆ 商業道徳の要

信用こそが全てのもと。わずかな信用もその力は全てに匹敵する。

◆ 競争の道徳（お互いが商業道徳を尊重するという強い意志を持つこと）

どんな仕事にもかかわらず、商売には絶えざる自己開発が必要なのだ。また、気配りも続けなければならない。進歩はあくまでもしていかなければならないが、それと同時に悪意の競争をしてはならないことを強く心に留め置かなければならない。

◆ 合理的な経営

その事業がどんなに小規模であっても、自分の利益が少なくても、国家に必要な事業を合理的に経営するならば、心は常に楽しんで仕事ができる。

一個人の利益になる仕事よりも、多くの人や社会全体の利益になる仕事をすべきだ。

【人の生き方について】

◆ 王道 「思いやりの道」をただ歩くだけ

資本家は「思いやりの道」によって労働者と向き合い、労働者もまた「思いやりの道」によって資本家と向き合い、両者のかかわる事業の損得は、そもそも共通の前提に立っていることを悟るべき。貧富の差をおやみになくすだけでは解決しない。

◆ 徳川家康の遺訓（内容自体は儒教からとったものでその多くは「論語」のなかの名言からきている）

人の一生は、重い荷物を背負って、遠い道のりを歩いていくようなもの。急いではならない。

不自由なのが当たり前だと思っていれば、足りないことなどない。心に欲望が芽生えたなら自分が苦しむことを思い出すことだ。耐え忍ぶことこそ、無事に長らえるための基本。怒りは自分にとって敵だと思わなければならない。……

以上が本書の一部抜粋であるが、現代における格差社会に、100年以上前の「論語と算盤」が注目されている。